様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２５ 日現在

機関番号：３２７１８
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ１３１５２

研究課題名（和文）大学英語教育における「井の中の蛙効果」研究－習熟度別クラス編成の是非を問う－

研究課題名（英文）Big-Fish-Little-Pond Effect in University English Education: The Appropriateness of Student Placement Based on Proficiency Level

研究代表者
関谷　弘毅（Sekitani, Koki）

東洋英和女学院大学・人間科学部・准教授

研究者番号：６０７５９８４３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本の大学英語教育における井の中の蛙効果を検討した。プレイスメントテストによる機械的な習熟度別クラス分けは、英語学習において常に学習者の自尊感情や学習動機を必ずしも最適化しないことが示唆された。続いて、習熟度別のクラス分けを行わない場合、どうすれば多様な学習者の混在による不利益を低減し、逆に利点を生かすことができるのかという課題に取り組んだ。その結果、ペアでの学習場面において、少なくとも短期的には正確さを重視する利点は少なく、むしろ相手に伝えるべき情報量を重視することが有効であることが示された。また、しっかりと話を聞いてくれるよい聞き役を用意することが重要であることも明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、日本において蓄積が少ないとされる「井の中の蛙効果」に関する研究に新たに知見を提供した。加えて、情意要因や学習スタイルなど、習熟度以外の要因によって新たなクラス編成を試行・検討することの必要性を示唆した。この点に学術的意義が認められる。また、多様な学習者が存在する教室を想定し、そのことによる不利益を低減し、利点を生かすことができる方法を模索した。本研究は、学習者同士の活動に着目し、しっかりと話を聞いてくれるよい聞き役を用意することの重要性を示した。このことは教育現場において一定の社会的意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study examines the “big-fish-little-pond effect” in Japanese university English as a foreign language education. The results suggested that mechanical placement based on proficiency tests does not always optimize learners’ academic self-concept and motivation in learning English. Subsequently, the study addressed how to minimize the disadvantages and maximize the advantages of having diverse learners in mixed-proficiency classes. The findings revealed that, in pair learning situations, directing attention to the quality and quantity of information to be conveyed (the conceptualizer) is more beneficial than focusing on formal accuracy (the formulator), at least in the short term. Furthermore, it was found that having a good listener with sufficient active listening and questioning skills is important.

研究分野：英語教育学

キーワード：井の中の蛙効果　習熟度別クラス　学業的自己概念　学習動機　聞き役　傾聴技法　質問技法

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

入学した大学生の英語力格差は、10 年以上前から問題視されるようになり（佐藤, 2011)、習熟度別授業実施校の増加につながっている。一方で、同じ習熟度クラスにいる学生のうち、どういった学生が最も習熟度別クラス編成の恩恵を受けているのかと言う点に着目した研究はほとんどなされていない。例えば、初級クラスと中級クラスの境界線上にいる場合、どちらのクラスに所属した方が良いのかということは指導者や学生にとって切実な問題である。しかしこのようなことを直接検討した研究は見当たらない。そこで、教育心理学分野で提案されている「井の中の蛙効果（big-fish–little-pond effect）に着目した。井の中の蛙効果とは、個人の能力が同じであっても、学力の高い（低い）学校やクラスに属している生徒ほど学業的自己概念（自尊感情）が低い（高い）ことを指す（Marsh, 1987)。

２．研究の目的

「井の中の蛙効果」は日本の大学の英語教育においても安定して現れるのか？　それは一定の条件においてのみ現れるのか？　もし現れるとしたらなぜか？　こうした疑問に対する答えを知ることが研究の目的であった。ほとんどの大学・学部で英語が必修化されている現状を踏まえると、目的が達成できればクラス編成のあり方に大きな示唆を与えられると考えた。

３．研究の方法

本研究では大学英語教育により有益な示唆を得るため、井の中の蛙効果の検討対象を元来の学業的自己概念や動機づけのほか、学習ストラテジーの使用、学習量にも拡張した。具体的には、日本の大学英語教育における井の中の蛙効果を検討することを目的に、以下の 4 つの課題を設定した。①大学生を対象に入学時から学期（学年）終了時にかけ、英語学習に対する学業的自己概念、学習動機、学習ストラテジーの使用、学習量の変化が、所属する習熟度別クラス及びそのクラス内での位置づけによりどう異なるのかを比較・検証する。②異なる場合、その原因及び心的な変容プロセスを検討する。③結果が学生の学びの専門（学科など）によって異なるかどうかを検討する。④習熟度別ではないクラス編成において、多様な学習者が混在することによる不利益を低減し、利点を生かすための方法を探る。なお、課題④について、研究開始当初は、英語を学ぶ条件が比較的類似している中国の大学生と井の中の蛙効果比較し、日本の文化的特異性を検討することを予定していた。しかし、2020 年初頭ごろから新型コロナウィルスの感染が拡大し、当初予定していた中国の主要都市でロックダウンが施行されて調査が不可能となったため変更した。

４．研究成果

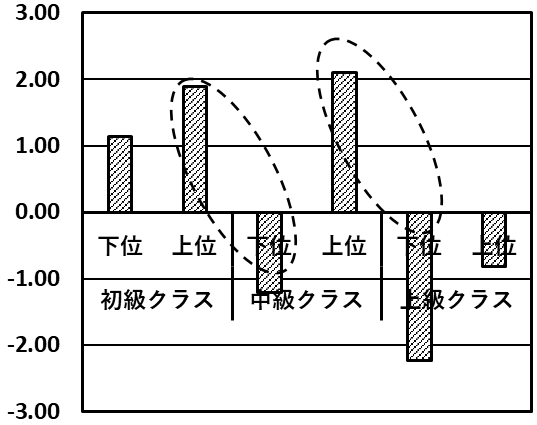
上述の課題①②③に関連し、井の中の蛙効果を日本の大学英語教育において検討した。具体的には、所属するクラスの習熟度レベルとクラス内の相対的な位置が、学業的自己概念、学習動機、学習時間に与える影響を学期の初めと最後に測定した。257 名（英語専攻 50 名と、英語非専攻 207 名）が調査に協力した。その結果、非英語専攻の学生はより習熟度の高いクラスに所属すると学業的自己概念が高まる傾向が見られた。一方で、英語専攻の学生はより習熟度の低いクラスに所属すると学習動機が高まり、クラス内の相対的な位置が高いとさらに学習動機が高まる傾向が示された。これらの結果から、プレイスメントテストによる機械的な習熟度クラス分けは、英語学習において常に学習者の自尊感情や学習動機を最適化するわけではないことが示唆された（図 1)。

次に、上述の課題④に関連し、クラス内の他の学習者（ピア）がどのような態度・振る舞いを示せば、多様な学習者が混在することによる不利益を低減し、逆に利点を生かすことができるのかを模索することを中心的な研究活動とした。まず、英語を発話する際に、スピーチプロダクションモデル（Levelt, 1989）において、Conceptualizer（「何を話すのか」を担当するモジュール）と Formulator（「どのように話すのか」を担当するモジュール）のどちらに注意を向けるかということが、話の複雑さや文法に対する認識にどのように影響するかを比較した（図２)。日本人大学生 42 名を Conceptualizer 注促進条件と Formulator 促進条件に無作為に割り当てた。1 枚の絵を提示し、Conceptualizer 促進条件の学習者には絵の内容にできるだけ多く触れテンポよく話すように、Formulator 促進条件の学習者にはできるだけ正確に間違いのないように話すよう指示した。2 回練習したのち 3 回目を本番課題として発話を録音した。発話プロトコルの分析の結果、Conceptualizer 促進条件の方が流暢さが高かった。複雑さ、正確さに差は見られなかった。また、文法を重視するビリーフを持つ学習者は Conceptualizer 促進条件に比べ、Formulator 促進条件のほうが流暢さと複雑さが高まる傾向が見られた。その結果、Formulator に焦点を当てた場合、学習者の発話の複雑さが顕著に向上し、文法の重要性に対する意識も強化されることが確認された。

続いて、言語活動を学習者同士で行う際に、よりよい聞き役になるための要件を特定すること、そしてそれを身に着けるための介入法の開発を目標とした。具体的には、傾聴技法と質問技法の

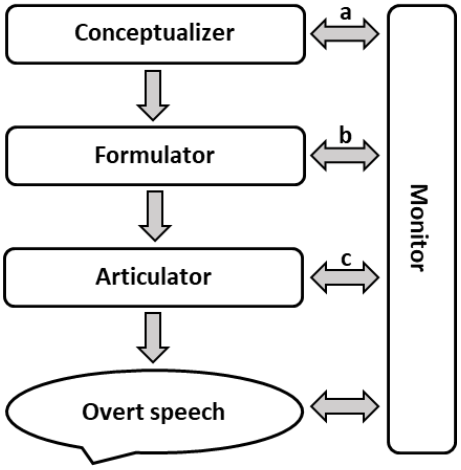
教示が、学生の英語の対話活動の充実にどのように寄与するかを分析した。また、この教示の効果が個々の情緒要因によりどの程度変化するかも合わせて検討の対象とした。日本の初級英語学習者 55 名を対象とし、傾聴技法群、傾聴技法＋質問技法群、統制群の 3 つに分けた。各群には、それぞれの条件に応じた教示が提供した。分析の結果、傾聴技法の教示が話者の発話の流暢さと正確さに良好な効果をもたらし、さらに質問技法に関する教示が加わると正確さをさらに高めることが明らかとなった。また、発話において誤りを犯すことにおいてリスクを極力避ける傾向のある話者は、相手が積極的な傾聴技法を用いることで、その結果が向上することも確認された。

図 1
学期初期から学期末にかけての動機づけの変化（Sekitani, 2022 をもとに作成）



＊楕円部分を見ると、無理して上のクラスに入るよりも下のクラスの上位層にいた方が、動機づけが向上することがわかる

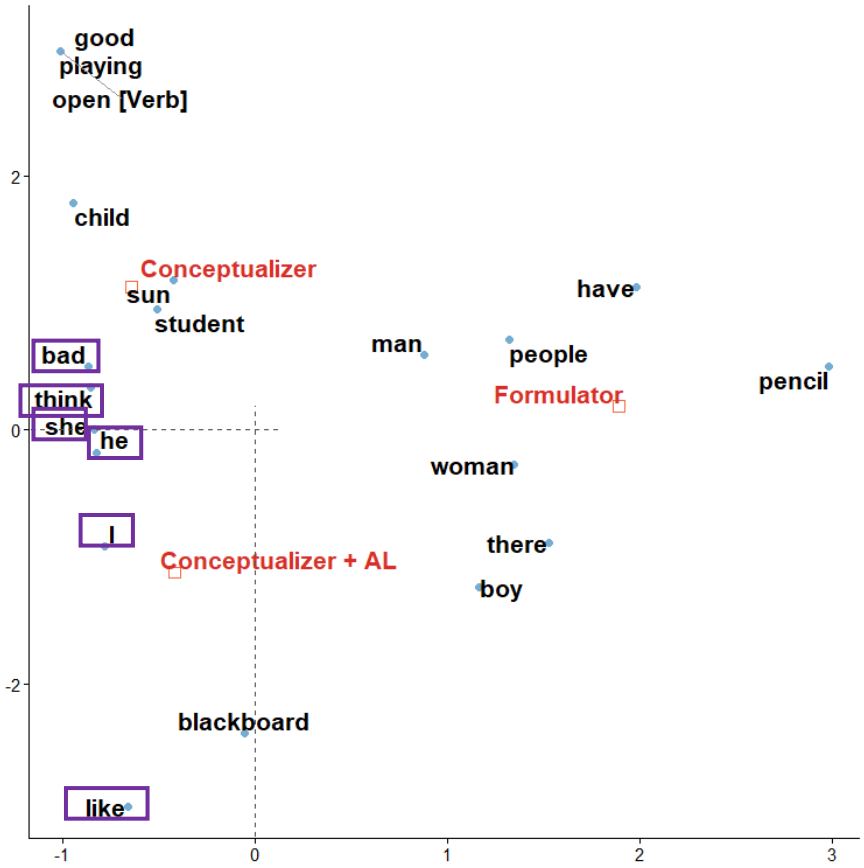
図 2
スピーチプロダクションモデル



＊青谷（2012）が Levelt (1989) を修正して作成

さらに別の実験授業で、傾聴技法の教示に加え、スピーキング時の発話の正確さと情報量のどちらを強調するかという点が、学習者の言語表現にどのような影響を与えるかを調べた。実験は、日本の初級英語学習者 55 名を、Formulator 重視群、Conceptualizer 重視群、Conceptualizer 重視+傾聴技法群に分けて行った。その結果、情報量を重視することが特に流暢さを向上させる一方で、正確さは著しく変わらないことが分かった。また、傾聴技法の教示が組み込まれた場合、さらに流暢さが増すことが示された。発話内容の書きおこしを分析すると、情報量を重視することにより、“like” “bad” や “think” といった、絵の描写だけでなく、感想や意見を述べるときに使う語の産出頻度が高まることがわかった（図 3)。本研究の結果から、初級学習者のスピーキング学習において、少なくとも短期的には正確さを重視する利点は少なく、むしろ相手に伝えるべき情報量を重視し、しっかりと話を聞いてくれるよい聞き役を用意することが重要であるといえる。

図 3
3 つの群と産出語の頻度の対応分析



本研究は、4 つの課題を設定し、日本の大学英語教育における井の中の蛙効果を検討した。プレイスメントテストによる機械的な習熟度クラス分けは、英語学習において常に学習者の自尊感情や学習動機を最適化するわけではないことが示唆された。続いて、習熟度別のクラス分けを行わない場合、どうすれば多様な学習者が混在することによる不利益を低減し、逆に利点を生かすことができるのかという課題に取り組んだ。その結果、ペアでの学習場面において、少なくとも短期的には正確さを重視する利点は少なく、むしろ相手に伝えるべき情報量を重視するとよいことが示された。また、しっかりと話を聞いてくれるよい聞き役を用意することが重要であることもわかった。具体的には、傾聴技法と質問技法の教示が、英語スピーキングの諸側面に好影響を与えることが明らかになった。今後は、多様な学習者がいるクラス内でどうすれば学習者同士の学習が最適化されるのかという点をさらに追究するとともに、井の中の蛙効果が英語習熟度、専門性、文化、文脈によって現れ方がどのように異なるのかということを検討することが重要であると考える。

＜引用文献＞

佐藤美津子. (2011). 「大学入試の多様化と学力格差: 4 年制私立大学を中心にして」. 『グローバルスタディーズ学部紀要』, 3, 81–92. https://tama.repo.nii.ac.jp/records/222

Aotani, M. (2012). *Eigo gakushuuron: Speaking to sougouryoku* [Theory of English learning: Speaking and proficiency]. Asakura Publishing.

Levelt, W. J. M. (1989). *Speaking: From intention to articulation*. MIT Press.

Marsh, H. W. (1987). The big-fish-little-pond effect on academic self-concept. *Journal of Educational Psychology*, *79*, 280–295. https://doi.org/10.1037/0022-0663.79.3.280

Sekitani, K. (2022). The importance of a peer who plays a listener's role in English as a foreign language speaking practice: Effects of teaching active listening and questioning skills. *JACET Journal*, 66, 75–96. https://doi.org/10.32234/jacetjournal.66.0_75

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 SEKITANI, Koki	４．巻 19
２．論文標題 The “Big-Fish-Little-Pond Effect” in EFL learning: Effects of class proficiency and relative class position on academic self-concept, learning motivation, and study time	５．発行年 2022年
３．雑誌名 JACET Chugoku-Shikoku Chapter Research Bulletin	６．最初と最後の頁 37-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 SEKITANI, Koki	４．巻 66
２．論文標題 The importance of a peer who plays a listener’s role in English as a foreign language speaking practice: Effects of teaching active listening and questioning skills	５．発行年 2022年
３．雑誌名 JACET Journal	６．最初と最後の頁 75-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32234/jacetjournal.66.0_75	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 関谷弘毅・磯部祐実子	４．巻 24
２．論文標題 大学生の英語運用能力向上を規定する要因の習熟度別検討－動機づけ，学習ストラテジー，学業的自己概念，学習時間に着目して－	５．発行年 2021年
３．雑誌名 広島女学院大学大学院言語文化論叢	６．最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 SEKITANI, Koki	４．巻 18
２．論文標題 To which aspect of speech should EFL learners direct their attention to best demonstrate their speaking proficiency?	５．発行年 2021年
３．雑誌名 JACET Chugoku-Shikoku Chapter Research Bulletin	６．最初と最後の頁 19-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 Sekitani, K.
２．発表標題 What aspect of speech should novice EFL learners focus on to improve their speaking proficiency most effectively?
３．学会等名 The 54th Annual Convention of the CASELE
４．発表年 2023年

１．発表者名 Sekitani, K.
２．発表標題 Should novice EFL learners direct their attention toward form accuracy or information volume while speaking? Case in which the interlocutor attempts to elicit utterances
３．学会等名 KATE The 47th Annual Convention in Saitama
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関